

開通 55 周年記念「芸術作品に見る首都高展」の開催にあたって

首都高速道路は今年の 12 月 20 日で開通 55 周年を迎えます。

2020 年の東京オリンピック・パラリンピックへの関心が高まっていますが、首都高の初期の役割として、1964 年の東京オリンピックで海外選手団を迎えるため、10 月 10 日の開会式の直前、10 月 1 日に羽田空港と代々木の選手村を直結する区間が全通しました。その後、各路線が順次開通し、現在では総延長が 310 km を超え、一日 100 万台が利用する、まさに首都圏の大動脈となっています。

さて、首都高は、世界に類を見ないとでも特殊な高速道路ではないでしょうか。超過密都市の制約された条件の中で、既存の街路、河川、港湾や江戸城のお堀など公共空間を最大限有効活用して建設され、その結果、アップダウンやカーブが多く、また複雑な線形の高架橋、JCT 部やトンネルなど、あたかも生き物のような有機的な構造物となっています。特に、都心環状線をはじめ、箱崎、大黒等の JCT 部やレインボーブリッジ、横浜ベイブリッジ等の長大橋では、首都高の構造物のダイナミックさを体感できると思います。

このような首都高独特の構造美、存在感に芸術家の方々が自然と引き寄せられ、絵画、写真、音楽、映画、文学など様々な作品に首都高が登場しています。5 年前に東京タワーで開催された「開通 50 周年記念首都高展」でこれらの一部を紹介し、来場者から大変好評を頂いたことから、将来、鉄道会社のような常設の「首都高ミュージアム」が開設されることを夢見つつ、首都高を題材にした芸術作品を個人的に蒐集してまいりました。

今回、開通 55 周年を記念して、この都市にしかない「首都高」というアイコンを、様々なアート表現により俯瞰して頂く展示会を開催します。この展示をご覧頂き、歴史ある首都高を少しでも身近に感じて頂けたらありがたく存じます。2020 年の東京オリンピック・パラリンピックの際も、首都高は大会運営を支える交通ネットワークとして機能します。世界中から注目される都市のインフラとして、これからも首都高を発信していけたらと考えています。